

【浜松市長賞】

「檸檬」を読んで

静岡大学教育学部附属浜松中学校 三年 木村 凜

少なくなっていくカレンダー。蝉時雨に包まれ、机にかじりつく毎日。

真夏の思い出は、ラムネのビー玉のようにすっかり閉じこめられてしまった。

模擬試験の結果に一喜一憂し、焦燥感や不安に襲われる。なかなか結果を出せずに落ち込む自分、先生の評価を気にしたり、友達と比べたりする自分。モヤモヤとした揺れ動く気持ちをうまく言葉にできないもどかしさが日に日に募っていく。

そんな私の複雑な心境を察したのか、父は一冊の薄い小説を私の机の上にそっと置いた。それが梶井基次郎の代表作「檸檬」だ。帯を見ると、かの三島由紀夫がこの作品を「日本最高の短編小説である」と評してい

る。さわやかで甘酸っぱい果物のタイトルから、楽しくて爽快な青春小説をイメージしていた私の期待はあっさりと裏切られた。冒頭から、「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた」と、救いようのない暗さに満ちているではないか。ページをめくる手にためらいを感じつつ、そのまま読み進めた。

主人公の「私」は、何をやっても思い通りにいかず、肺を病み、借金までつくり、ふらふらとあてもなく京都の街をさまよい続けている。年齢も職業も不詳で、プロフィールは一切書かれていないが、どうやら美大卒の無職の青年らしい。書店の「丸善」が大好きで足しげく通っていたのに、心身を病んでからは憎しみの対象となり、近づくことさえできなくなってしまう。

ある夜のこと、彼は古びた果物屋の前で足を止める。その棚に置いてあった檸檬の輝きに引き寄せられ、一個だけ買い求めて懐に入れるの

だが、その瞬間から彼の憂鬱が嘘のように晴れていく。まるで真っ黒な画用紙に黄色い絵の具を一滴たらしたかのように、そこから物語の雰囲気気が徐々に軽く、明るくなっていくのだ。

「何がさて私は幸福だったのだ」と彼は前向きで穏やかな気持ちになる。檸檬の色、形、香り、冷たさが塞ぎ込んでいた彼の心を変えたのだ。それにしても、たった一つの檸檬を手に入れただけで、人の心がそう簡単に変わるものだろうか。確かに檸檬という果物は、見ているだけで爽やかな気分になれたり、活力が湧いてきたりするけれど。

すっかり心が軽くなり、幸せな気持ちになった彼は、あれほど避けていた「丸善」にも悠々と入っていった。ここからのシーンがこの小説のクライマックスになる。彼は画集を手当たり次第に棚から引っ張り出し、城のように高く積み重ねていく。読み進めるうちに行間から不穏な空気が漂ってきて、私は不安になった。彼は驚きの行動に出る。なんと、そ

の城の頂上に檸檬を乗せて、そのまま食わぬ顔をして立ち去ってしまったのだ。

外に出た彼は檸檬を「時限爆弾」に例えて、十分後に「丸善」が爆発することを想像し、「してやったり」とほほ笑む。多くの客で賑わう「丸善」を檸檬で破壊した彼は、想像上のテロリストになったのだ。

今なら、誰かがSNSに投稿して炎上しそうだが、私はこのシーンが一番好きだ。「丸善」という憧れであり不安の塊でもあるその場所を爆弾で吹き飛ばそうとする行為は、三島由紀夫の「金閣寺」を連想させる。でも「檸檬」の主人公は実行に移していないので、私は彼を嫌うどころか、微笑ましく思える。

私にはこんな大胆不敵な行動に出る勇氣はないが、読んでいる間、主人公と同じようにくすぐったい気持ちになった。幼い頃のような無邪気なイタズラを思い出し、できることなら私も行きつけの書店で同じこと

を試してみたいとさえ思った。

ユーモアと繊細な美しさを持つ文体は、映像的で、何度もくり返し読みたくなる。「ひすい色の香水壺」「びいどろの味ほど幽かな涼しい味」などの鮮やかな描写が物語を立体的にしている。これこそわずか八ページに隠された、日本の近代文学の魅力だと思う。

梶井基次郎がこの作品を通して伝えたかったこと。それは、どんなに辛くて心が折れそうになっても、檸檬のように、日常生活の中にある身近なものが気分を変えてくれるし、立ち上がる勇気を与えてくれることもあるということだと思う。勉強漬けの単調な毎日は楽しくない。でも、自分の心の持ちようで楽しむことはできるんだよと。私もこの主人公にとっての「檸檬」と同じように心を軽くしてくれる「秘密兵器」を普段の暮らしから見つけて、高い壁を乗り越えたいと思う。

「ガリ、ジュワー。」

身震いするほど口に広がる強い酸味。すぐに追いかけてくるのかな。苦味。かの黄色い紡錘形の果実の重さに、「つまりはこの重さなんだな」としみじみと納得する私がいる。不安な心を凌駕する爽やかさを糧に、今日も机に向かった。

書名 檸檬

著者名 梶井 基次郎

発行所 岩波書店

